

ソフォニスバ・アングイッソラ 《画架に向かう自画像》における世俗的表現について

平沢 遼 (東北大学)

本発表では、ソフォニスバ・アングイッソラ(1535年~1625年)作《画架に向かう自画像》(1556年)において、画家が世俗的な表現を用いて聖母子を描いた点について考察する。

本作は、画家ソフォニスバが女性と幼児の絵を描いている姿を現した自画像である。先行研究では、本作で描かれる女性と幼児は聖母子と解釈され、画家は自らを聖母子を描く聖ルカと重ね合わせ、自らの社会的地位を賛美したと考えられてきた。しかしこの作品に描かれる女性と幼児の姿勢は聖母子のものとして一般的ではない。ソフォニスバの描く女性と幼児の姿は、聖母によるわが子への神聖な愛を示すエレウサ型と呼ばれる聖母子に近いが、聖母子が今から接吻するかのように親密な描写はアイコンやそれ以外の先行作品にほとんど見られない。

発表者は、画中画における人物像たちが聖母子であるという解釈を受け入れると同時に、これまで見過ごされてきた、このような親密な描写の背景には、同時代におけるエロティックな世俗的美術からの画家の学びがあった可能性を以下の二点から考察する。

第一に、16世紀前半のイタリアでは、宗教的美術と世俗的美術との顕著な融合現象が起きた。例えば、イタリア文化に精通していた著述家エラスムスは『キケロ主義者』(1528年)において、同時代のイタリアではキリスト教的美術があたかも古代神話のエロティックな場面のように見える現象を嘆いた。J・G・ターナー(2017年)など近年の研究は、実際この頃、画家たちが世俗的な愛の描写を自らの課題とみなしはじめたことを明らかにした。例えば、ティツィアーノによる《マグダラのマリア》には、古代彫像に由来するエロティックな「恥じらいのウェヌス」が下敷きとして用いられた。

第二に、15~16世紀にイタリアで広まった世俗的な場面を描いた作品に見られる恋人たちの姿には、ソフォニスバによる女性と幼児に近い描写が見いだされる。ジュリオ・ロマーノが描き、マルカントニオ・ライモンディが版画化した『体位集』(I Modi)(1524年)やジョヴァンニ・ヤコポ・カラリオの版画集『神々の愛』(Gli amori degli dei)(1527年~1528年)では、男女が見つめあう、もしくは接吻し、女性が相手の顔に手で触れている姿が描かれる。これらの例は、ソフォニスバによる画中画における聖母子と近似している。本発表では、ソフォニスバによる画中画とソースを共有していると考えられるディアナ・スクルトリの《聖母子》(1576年)(フランチェスコ・サルヴィアーティによる作品をもとに制作)における聖母とキリストの間の親密な姿にも注目する。ソフォニスバは、これらの例を学びながら画中画の聖母子を着想した可能性がある。

本発表では、これまであまり注目されてこなかった、ソフォニスバとエロティックな世俗的美術との接点を探り、この画家の新たな一側面を明らかにしたい。